

木更津市史編さんだより

木更津の歴史・文化・自然再発見マガジン

—明治150年記念—



発行者 木更津市教育委員会 教育部文化課

〒292-8501 木更津市朝日3-10-19 木更津市役所朝日庁舎

Tel:0438-23-5309 Fax:0438-25-3991 E-mail:bunka@city.kisarazu.lg.jp

第3号



木更津県史蹟に設置された保存碑

木更津県が成立し、貝淵村(貝
安房・上総国に木更津県が成立し、貝淵村(貝
明治四(一八七一年七月に廃藩置県、続いて十一月に県の廃合が実施され、同月十三日
に
あつた旧
桜井藩邸に
木更津県庁
舎を置きま
した。その後、
木更津県が
廃止される
明治六年ま
での僅かの

慶応四(一八六八年)年九月に「明治」と改元され、薩摩(鹿児島県)・長州(山口県)を中心とする新政府軍と旧幕府軍との間で起こった戊辰戦争(一八六八〜一八六九)を経て、源頼朝が鎌倉幕府を開いてからおおよそ七〇〇年間続いた武士の時代は終わりを告げ、日本は天皇を中心とする近代国家へと進んで行きました。
明治四(一八七一年)七月に廃藩置県、続いて十一月に県の廃合が実施され、同月十三日安房・上総国に木更津県が成立し、貝淵村(貝



木更津明治元年事
始(ことばはじめ)

平成三十(二〇一八)年は、明治元(一八六八)年から数えて一五〇年に当たります。

間、県政の中心を担っていました。木更津県庁舎のあつたところは、初の県庁所在地として木更津市指定文化財「貝淵木更津県史蹟」に指定されています。(事務局)

まちの中に残る明治

木更津駅周辺を散策すると、明治(一部幕末)から創業する店が残っています。その中のひとつにヤマニ綱島商店(中央二丁目)があります。古くは魚河岸であつた旧仲片町(通称「さかんだな」)に軒を連ねた老舗の商家で、乾物等をあつかつています。江戸時代に神奈川県綱島村から木更津へ移住したと伝えられ、以前は魚屋を営んでいましたが、慶応二(一八六六)年に現在の商店をはじめました。道路に面した土蔵造り風の平入り店舗(前店蔵)とその奥に土蔵造り風の



ヤマニ綱島商店店舗

の仕事情場
(中店蔵)がある二棟の古い建物が並んでいます。建物の一部は、明治時代のたずまいを残す市内でも数少ない



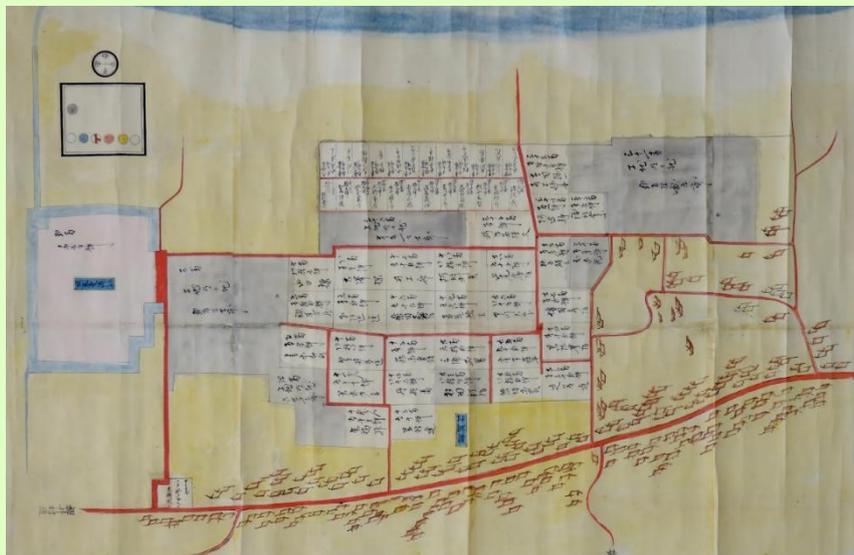
木更津県の成立(『図説木更津のあゆみ』より転載)

同じころ駿河・遠江国(静岡県)の七藩が房総に移転するのに伴い、木更津市域では目まぐるしいほどに管轄替えが行われました。旧中島村は知県事から三上藩(滋賀県)に、旧木更津村は前橋藩(群馬県)から桜井藩に、旧請西・貝淵村は知県事から桜井藩に替わりました。桜井藩は、金ヶ崎藩(元駿河小島藩)が旧南子安村(君津市)から明治二年貝淵村に移って成立した市

と命名され、県域は常陸国(茨城県)の一部まで含んでいました。
慶応四年七月、房総知県事柴山 典(しばやまてん)が八幡宿(市原市)に來任し、藩領を除いた安房・上総地域を管轄する新政府の役所が初めて発足しました。明治二(一八六九)年二月に知県事管轄区域は宮谷県(みやざくけん)と命名され、県域は常陸国(茨城県)の一部まで含んでいました。

木更津県の成立

建物で、国登録有形文化財に登録されています。(事務局)



明治時代の旧貝淵村周辺の様子※絵図の左側に「旧木更津県庁」と記されています。(個人蔵)

域内唯一の藩でした。この間、柴山知県事は諸藩を動員して治安の回復に努めました。
明治四年十一月に木更津県が成立し、県権令(ごんれい) ※県令に次ぐ地方長官)は前宮谷県権知事の柴原 和(しばはら やわら)が任命されました。木更津県は、明治五年五月、区画制(五十区一九七画)を定め、七月に全県一三郡を九区域(組)に分け、区・画や村には区長や

戸長を置きました。柴原権令は、高反別取調や壬申地券発行、学事奨励、育児政策などを推し進めたほか、明治六年二月に議事則を制定し、議事会(県会)を開きました。代議人は九区域から二名ずつ選出され、地方議会の先駆的な開設でした。その後、明治六年六月十五日に千葉県が設置され、木更津県は廃止されました。
千葉県成立後も、大区小区制のもとで第四大区の区長らが事務を扱う大区扱所、郡区町村編制法にもとづく望陀(もうだ・周准(すず)・天羽(あまは)郡役所、郡制による君津郡役所が木更津に置かれました。郡役所は、はじめ成就寺(富士見)を仮庁舎としていました。
近世に江戸と結ぶ海上交通の要地として栄えていた木更津は、近代に入っても各地から集貨した米穀・薪炭・木材・海産物などの産物を海路京浜地方などに移出し、同地方からは雑貨・日用品・肥料などを移入し各地に売りさばく物資集散の商業地として活気を呈しました。
明治十三(一八八〇)年、木更津村の人口は五四三四人で、飯沼(銚子市)、船橋、佐原(香取市)、千葉、佐倉の各町村に次ぐ県内第六位に位置し、上総の政治・経済の中心地でした。
※『市制施行七〇周年記念 図説木更津のあゆみ』『近現代編概説』「木更津県の成立と千葉県」(二〇一一)を改変して掲載。(事務局)

戊辰戦争と木更津

平成三十(二〇一八)年は明治一五〇年とともに戊辰戦争一五〇年にも当たります。戊辰戦争は、慶応四年正月の鳥羽・伏見の戦いに始まり、翌明治二年五月の箱館五稜郭の戦いで終了した国内戦争です。

請西藩(文政八(一八二五)年に貝淵藩として成立)林家の藩領の村々がありました。三代(貝淵藩から数えると四代)藩主林忠崇が慶応三(一八六七)年八月に家督を継ぎましたが、十月十四日に大政奉還、十二月九日には王政復古の号令が発せられ、江戸幕府は終焉を迎えました。

鳥羽・伏見で戦いが始まると、忠崇も九段坂(東京都千代田区)の屋敷から出陣し、航路で向かいましたが、悪天候のため品川沖で天候の回復を待っている間に徳川慶喜が江戸城に帰ったので、戦わずして戻りました。その後、木更津周辺の情勢が不穏となり三月に真武根陣屋へ入



請西藩主 林 忠崇(個人蔵)

り、新政府に服従か徳川家再興のため戦うか藩内で議論を繰り広げました。

その頃、江戸から脱走した福田八郎右衛門率いる撤兵隊(さつべいたい)およそ三〇〇〇人が四月十三日に木更津に入り、徳川氏の名誉回復への賛同を求め、忠崇はこれに応じて戦争の用意に取りかかりました。そして同月二十八日には、伊庭八郎、人見勝太郎が率いる遊撃隊も木更津に上陸し、徳川回復を求め、忠崇はこれにも同意しました。ところが、撤兵隊は自ら義軍府と称して粗暴な振る舞いが多く規律が乱れがちなのに比し、遊撃隊の隊士は素行も良く真の忠義の志を持つていたため、忠崇は、遊撃隊と同盟してともに戦うことを決めました。忠崇は、藩主自ら請西藩を脱藩し、同じく藩を脱藩した藩士とともに遊撃隊へ組み入れられ、真武根陣屋を出ました。



林 忠崇著『おもひ出くさ』より
林 忠崇たちが出陣する様子

遊撃隊は、房総半島を南下し、前橋藩(群馬県)が預かっていた富津陣屋(富津市)を取り囲み、陣屋の役人と談判して武器、兵員と軍資金などを受け取り、その後館山(館山市)に向かい、船で真鶴(神奈川県)に渡りました。すぐさま小田原城に行き藩主に対面してこのたびの決起の盟主となるよう説得するものの断られ、見返りに武器、食料、軍資金などを受け取って葦山、御殿場(静岡県)、甲府近郊の黒駒(山梨県)、沼津(静岡県)などを転々しました。五月十九日に江戸の彰義隊の決起に呼応して新政府軍を攻撃するため箱根に陣を張り、二十六日に関所を準備する小田原藩の軍勢との間で激しく戦いましたが兵力の差は歴然で、多くの死者を出しました。この戦いで戦死した請西藩士の墓が、静岡県熱海市の日金山東光寺(真言宗)などに今も残っています。

遊撃隊は、二十七日に退却を開始し、熱海を出港、翌二十八日に館山へ入港し、旧幕府海軍の長崎丸に便乗して奥羽列藩同盟の戦列に加わるため海路北上しました。六月三日小名浜(福島県)に上陸して、平潟の戦闘に参加した後、磐城平、相馬中村、会津若松、米沢(山形県)など各地を転々とするなか、忠崇ら請西藩士たちは遊撃隊と別れ、九月二十一日に仙台(宮城県)で降伏しました。半年近い行軍の末、当初五九人だった忠崇と請西藩士の一行は戦死や病



箱根戦争で戦死した請西藩士廣部与惣治正邦、秋山莊蔵の墓(右)。現在は、子孫の方によって、整備されています(左)。
(写真提供:東京大学名誉教授 廣部雅昭氏)

死などで二〇人になっていました。

請西藩は戊辰戦争のさなかの慶応四年五月に所領を没収され、全国の大名で唯一取り潰しの処分を受けました。

戦後、忠崇は親族の肥前唐津藩(佐賀県)小笠原家に預けられ謹慎の後、明治五(一八七二)年罪を許されました。その後、様々な職業に就くものの長続きせず、不遇な時代を送っていました。明治二十六(一八九三)年に家督を継いだ甥の忠弘が男爵に、忠崇自身も翌年従五位下に叙せられ、ようやく名誉回復がかないました。

一方、木更津周辺にあった旧幕府勢力は、忠崇や請西藩士たちが真武根陣屋を出る同じ頃、一時は江戸の近くまで北上して新政府軍と対峙しますが、閏四月三日からの市川・船橋戦争、同月七日からの五井戦争で、多くの犠牲者を出して総くずれとなり、木更津方面に敗走しました。

新政府軍は、同月八日に真如寺(真里谷)に至りますが、旧幕府勢力はいなかったため同寺を焼いて撤収しました。五月の初めになると、旧幕府支持勢力の一派が木更津周辺に寄り、請西藩領を警備していた飯野藩(富津市)兵を襲い、さらに佐貫城(同市)にも夜襲をかけました。新政府軍は、下総佐倉藩(佐倉市)や飯野藩、及び富津陣屋を拠点に警備にあたる前橋藩に

木更津村への出兵を命じて、旧幕府勢力の一掃を目指しました。五月二十二日に木更津村を包囲した佐倉藩は旧幕府勢力へ総攻撃を図ろうとしましたが、その直前に旧幕府勢力がいなくなることがわかり、取り止めとなりました。

こうして、木更津周辺での戊辰戦争は事実上終了し、近世の終わりと近代の始まりを告げていたのです。

※『市制施行七〇周年記念 図説木更津のあゆみ』近世編「請西藩林氏と真武根陣屋」近現代編「戊辰戦争と木更津」(二〇一三)を改変して掲載。事務局)

トピックス

小櫃川河口周辺の干潟

自然部会 相澤敬吾

昭和四十二(一九六七)年、木更津く横浜間にフェリーが就航(一九七二)していた頃、横浜高島栈橋を出発して木更津鳥居崎海岸に近く間の情景を今でも思い出します。ゴミと廃油が浮かんだ黒い海が、千葉県側に近づくると遠浅の海となりエメラルドグリーンに輝いていました。浚渫(しゅんせつ)した航路を慎重にたどるフェリーの間近には、潮干狩りや海水浴に興じる人の姿さえありました。その鳥居崎から木更津南部の干潟が埋め立てられたのは昭和四十八年、石

油シヨツクの年。その後も東京湾の埋め立ては進み、九割以上の干潟を失うことになってしまいました。木更津市にあった干潟はその二／三がほぼ原形で残りました。袖ヶ浦市との境から小櫃川河口を経て自衛隊駐屯地南側まで約一〇キロメートルの海辺、最大一四〇〇ヘクタール、盤洲干潟と小櫃川河口干潟です。東京湾最大の干潟にして唯一の自然干潟で、木更津市民の誇るべき自然・文化遺産だと思います。

自然干潟 エコトーンという言葉は初めて聞く人は多いでしょう。エコトーンのエコは Ecology、トーンは「移り変わり」を表す tone で、「移行帯」、「推移帯」と訳され、異なるタイプの生息地や景観の境界域をさす言葉です。海と陸は直線的なコンクリート岸壁で急に分けられるのではなく、本来の東京湾沿岸なら、浅海から浜辺、砂丘、小さな水路、ヨシ原、塩性湿地（写真）、河川、草地、海岸林、河畔林そして農耕地、屋敷林など変化にとんだ領域が入り組んでいました。わずかな地形の高低差と水位の違い、砂と泥の配合、塩分濃度により、次々と多様な生物が暮らしました。この沿岸域エコトーンは、生物や物質の移動などを通じて相互に関連して成立します。たとえば、金田のノリの評価が高いのは小櫃川が陸の栄養を運んでくれるからで、猿蟹合戦の主役のアカテガニは海と陸が一続きでないと世代をつなげません（育つものにも産卵するのにも）。



小さな水路・ヨシ原・塩性湿地
もしくは後浜の泥質～砂泥質干潟

少し、小櫃川河口周辺の干潟の地形と生き物を紹介します。支柱柵方式のノリひび（写真）のある干潟の最前線（干潮線）では、イボキサゴ（写真）が砂浜を上下にうごめき掃除機のように餌を吸い込みます。三十年前には干潟全面に生息していたコアマモも（海草なので砂浜に根を下ろして定着できる）生息範囲を縮小させたがここに留まっています。足元が数センチメートル沈む区間があるので、一・五キロメートルの干潟を往復するのに一時間はかかります。砂の下の小さなエビやカニ、ゴカイは巣穴の落盤で迷惑しているに違いありません。初夏の砂丘（浜堤）でハマビルガオの甘い香を感じると、花を訪れる海浜



支柱柵方式のノリひび

性のハチに出会えるかもしれない。夏から秋に大挙して汀線に流れ着く海藻アナオサは、昔ながら潮の来ない浜に広げて干され食品、飼料、肥料にされましたが、今は汀に溜るばかりで懐かしい臭いを放ちいつか消えていきます。大きく育ったアシハラガニ（写真）が砂丘の斜面を浜に下ります。ヨシ原で泥を食べていた胃はまだ真っ黒ですが、汀の夏レストランでは流れ着く高栄養メニューにありつけるように。冬、河口干潟ではカニたちが活動しなくなるからか、プランクトンやデトリタスが貯まります（写真）。ヨシ原上空を毎年訪れる猛禽チュウヒとハヤブサ（写真）は、種の保存法の希少野生生物種です（環境省二〇一



堆積した珪藻とデトリタス
(バクテリアと有機物のかたまり)



アシハラガニ



イボキサゴ



珪藻の顕微鏡写真



ハヤブサ(田村撮影)



テリハノイバラ

七)。この他にも様々な生物が生息していて、そのこと自体が沿岸域エコトーンの連続性を示しています。

希少種の動向

小櫃川河口干潟の核心部分は浜堤後背(後浜)四三ヘクタールにあります。塩性湿地であるヨシ原、砂質干潟、泥質干潟、漣筋、陸生植物が見られ、生物多様性の観点から重要度の高い湿地に指定されています(環境省二〇一六)。内陸の生息種なら周囲に代替地を見出すことも可能ですが、海岸固有種の生息域は線状で、残された適地は点にひとしい。また、海浜河口性の甲虫目カメムシ科ゴミムシ類7種が同所に生息しているのは小櫃川河口だけだと、ある昆虫学者はその貴重さを指摘します。全国規模で起っている塩性湿地に依存する生物種の衰退に対する保全と再生は緊急の課題です。毎年実施されている市民参加型の調査で、次の希少種一六種が確認されています(柚原ら二〇一七)。*印は塩性湿地の確認種

○巻貝類：イボキサゴ、ウミニナ、*フトヘナタリ
○二枚貝類：*サビシラトリ、イソシジミ、ハマグリ、*ハナグモリ、*ソトオリガイ ○ゴカイ類：
*イトメ ○甲殻類：*ムロミスナウミナナフシ、*ハサミシヤコエビ、テナガツノヤドカリ、*ヒメアシハラガニ、*クシテガニ、*ウモレベンケイガニ、オサガニ

ハマグリは貝類養殖の主役として昭和三十三

年(一九五八)まで東京湾東岸で全国一の生産高を上げていましたが激減し、千葉県(二〇一七)では「消息不明・絶滅」の種とされました。その理由は、単純に環境悪化が原因と思われるかもしれませんが、国立環境研究所の金谷氏の実験(二〇〇六〜二〇一〇)では、羽田沖の環境の悪い場所でも意外にもハマグリの方がアサリより生き残り(ホンビノス並みに)、成長率も高かったといえます。氏は、ハマグリの産卵期がちょうど東京湾に酸素の少ない水域が広がる夏から秋と重なり、卵や幼生が死滅してしまうからという仮説を立てています。アサリは秋と春に産卵するので、現在の東京湾でもある程度生きていけるようです。そんなハマグリですが、小櫃川河口域でしばしば少数個体が採集される機会があります。放流個体の存在もある一方、遺伝的な解析により在来個体群が残存している可能性も指摘されています(風呂田ら未発表)。

結び

干潟を歩いていると、時に招かれざる客に出会います。漣筋(みおすじ)を三段跳びで横切るウシガエル、遊歩道の前にいた三〇センチメートルを越える最大級ミシシッピアカミミガメ、干潟のあちこちで赤ん坊の手形のような足跡を残すアライグマなどの外来種です。招かれざる物なら何とかしたいものです。ペットボトル、各種プラスチック、カンビン、漁網に廃船まで、さまざまなゴミが砂浜に打ちあがり、ヨシのふるい

にひっかかります。貝殻や流木拾い、美しいもの、金目の物を拾うビーチコミングと違い、干潟の清掃は、特に一人では無力です。干潟をまもる会(田村満代表)は、もう三十年以上干潟の清掃活動を年間行事としています。近年は金田小学校も、総合学習の中で高学年が干潟のゴミに取り組んでいます。市役所の環境部も協力し、市民や団体が二〇〇人も参加するクリーン作戦の後は、干潟はすがすがしい姿を取り戻してくれます。

最後に小櫃川河口干潟の保全に係る活動の軌跡の一端を紹介します。木更津市南部の埋め立てが竣工した昭和四十八年に、木更津北部、中部の小櫃川河口周辺の干潟埋め立ては中止されました(千葉の干潟を守る会一九七四)。昭和五十五(一九八〇)年には東邦大と千葉県生物学会により、初めてまとまった学術調査が行われ、県環境部でも自然環境保全地域指定候補地として昭和六十三(一九八八)年、平成八(一九九六)年、平成十五(二〇〇三)年に学術調査を実施しました。この間、「二一世紀に残したい日本の自然一〇〇選」森林文化協会・朝日新聞(一九八三)に選ばれたり、多くの識者にその重要性が指摘されたりしましたが、今だ、千葉県自然環境保全地域(現在九地域指定)とはなっていない。



うごめくイボキサゴと孔(上)



ハマグリ?・アサリ・シオフキ(上)



浜堤とアシハラガニの足跡(左)

引用文献

柚原剛・多留聖典・中川雅博(二〇一三)「東京湾小櫃川河口域のベントス相と希少種の動向について」『千葉県生物誌』六二―一…二八―三八p
 国立環境研究所HPより。刊行物 刊行物一覽 環境儀『環境儀』No.四五 金谷弦・中村泰男(二〇一三)「汽水域の干潟環境とその保全について」

(千葉県レッドデータブック改訂委員会) 二〇一『千葉県の保護上重要な野生生物―千葉県レッドデータブック―動物編二〇一―改訂版』五三八pp 千葉県環境生活部自然保護課 千葉県

桜井英博・風呂田利夫・大浜清(一九七四)『小櫃川―その河口と干潟―東京湾最後の自然干潟を守るために』千葉の干潟を守る会 二二p

市史編集部の活動報告

市では『木更津市史』を編さんするため、資料を調査しています。皆さんのお手元にある古文書や古い町並みの写真、農具、民具などは、木更津の歴史を知る手がかりとなります。お持ちの方は、情報提供のご協力をお願いします。

考古部会 『木更津市史』に掲載する遺跡の一



中世部会による高野山(和歌山県)の寺院での史料調査

中世部会 東京大学史料編纂所や千葉県文書館所蔵の木更津市関連資料の確認、「戦国遺文」「円覚寺文書」「称名寺文書」等所収史料の調査を行いました。また、市内や県外の寺院等で、真里谷武田氏関係資料の所在調査と資料撮影を行っています。

古代部会 『千葉県歴史』を基礎に収集史料の検討、「馬来田国造」等の古代氏族に関する調査や、「弟橘媛」「ヤマトタケル」伝説等の検討を行っています。

覧表や地図を作成しています。また市内の寺院を中心に石造物の所在調査等を行っています。

近現代部会 千葉県文書館や市内公民館等が所蔵する旧役場文書や個人史料等、これまでに収集した史料の目録作成・撮影を行っています。また木更津・牛込・鎌足地区では、新たに聴き取り調査を行い、史料調査を行っています。建造物の調査では、新田地区の商家、高柳地区の昭和初期の建物、下望陀・鎌足・富来田地区の土蔵の調査等を行っています。また貝渚地区

近世部会 郷土博物館金のすず等が保管する古文書等資料の収集・調査・史料整理を行いました。また、小浜・桜井・犬成・長須賀・波岡・茅野・富来田地区では、個人宅を中心に聴き取り調査、史料収集を行い、収集した史料の目録作成や撮影を行いました。そのほか、木更津図書館が所蔵する和本の合同調査を、引き続き行っています。



高野山と木更津市民とのゆかりを示す石柱



土蔵の解体の様子

蔵は、家の財産を災害や盗難から守るため、頑丈に建てられていました。解体の様子を調べることで、先人たちの技術力のすばらしさを知ることができます。

では、解体される土蔵を記録保存するため、所有者のご協力を得て解体調査を行っています。

民俗部会 吾妻地区及び吾妻神社に関する聴き取り・資料調査を行いました。また、木更津地区を中心に木更津図書館が所蔵する八劍八幡神社祭礼資料や、女性史・生業・統計等に関する資料の調査を行っています。

自然部会 環境は、盤洲干潟や牛込海岸の低生動物の調査・集計を行っています。地学は、馬来田・富岡地区の段丘や、笹子地区の露頭(崖)等を補足的に調査を行っています。また、市域に被害をもたらした地震について調査しています。動物は、小櫃川流域や草敷・田川・藪等の鳥類・魚類・両生類・昆虫類の生息調査種りリストを作成しています。植物は、千葉県立中央博物館と合同調査を継続実施し、太田・永井作・田川・伊豆島・下郡・茅野・真里・小櫃川河口付近等の調査を行い、市域内の二ノ三まで進んでいます。

お知らせ
平成三十年度木更津市史編さん事業公開講座「明治一五〇年記念 木更津地域から見た明治」を開催します。

(講演一)明治一五〇年記念 木更津地域から見た明治

※地域に視点をあてたとき、明治という時代はどのように見えてくるのでしょうか。



国立大学法人千葉大学と共催
 で開催した平成29年度木更津市史編さん事業公開講座・千葉大学公開市民講座「暮らしから見つける木更津の文化資源」の様子(上・左上・左下)

平成30年度木更津市史編さん事業公開講座

明治150年記念 木更津地域から見た明治

講演
 戊辰戦争150年 脱藩大名・林忠崇の戊辰戦争
 講師：實形 裕介(木更津市史編集委員会委員)

明治150年記念 木更津地域から見た明治
 講師：池田 順(木更津市史編集部会正現代部会長)

開催日時：平成30年12月22日(土) 14:00~16:30 (開場 13:30)
 開場：木更津市民会館中ホール
 定員：200名
 (文化課窓口、電話、FAX、E-Mailで申し込み)
 お問い合わせ：木更津市教育委員会教育部文化課
 TEL0438-23-5008 FAX0438-25-3991
 主催：木更津市教育委員会

文豪夏目漱石は、日本が明治末に欧米と肩を並べる「一等国」となったとする見方に疑問を投げかけました。この漱石の言葉を手がかりに、木更津地域の事例をとおして明治という時代を考えます。

(講演二)戊辰戦争一五〇年 脱藩大名・林忠崇の戊辰戦争

※木更津ゆかりの人物として請西藩主・林忠崇が注目されます。揺れる藩論のなかで、なぜ藩主は「脱藩」を決断したのか。戦い抜いたすえ完全に取潰しとなった藩の動向とは。藩を捨ててまで新政府軍に挑んだ青年大名の生き様を紹介いたします。

講師 木更津市史編集部会 部会長

池田 順(いけだ じゅん)氏

木更津市史編集委員会 委員

實形 裕介(じつかた ゆうすけ)氏

日時 十二月二十二日(土) 午後一時三十分

受付 午後二時開始

場所 木更津市民会館中ホール(貝渕二―一三

―一四〇)

刊行物のご案内

木更津市史編さんに関する刊行物を文化課または郷土博物館金のすずで販売しております。

『市制施行七〇周年記念 図説木更津のあゆみ』



〔A四版 本文二七四ページ〕
 二〇〇〇円
 内容 木更津の歴史・文化・自然を写真や図版を多く使ってわかりやすく解説しています。

〔A四版 本文一〇二ページ〕五〇〇円

内容「勤王の歌人・齋藤昌磨と安政の大獄」(實形裕介)「木更津市域への空襲の実相に迫る」(栗原克榮)「木更津の獅子まきについて」(田村勇)「震災後の希望の学舎」(渡邊義孝)「関東大震災復興から見た金田小学校校舎」(高木澄子)「木更津市の陸生爬虫類」(成田篤彦)「東京湾小櫃川河口干潟のシオマネキについて」(相澤敬吾)「木更津市の魚類 ハゼ亜目(ハゼ科、カワアナゴ科)」(田村満)

『木更津市史編さん事業公開講座記録集』平成二十六～二十八年度版(A四版 本文九〇ページ)五〇〇円

内容「盤洲干潟のいきものたち」「中世～戦国時代江戸湾をめぐる武田氏 ―戦国時代の木更津と真里谷武田氏―」「市史を編さんするということ」「こんなに身近に宝があった！～木更津の古民家・近代建築をたずねて～」

平成三十年度の刊行予定

『木更津市史研究』第二号(A四版)

『木更津市史編さん事業公開講座記録集』平成二十九年度版(A四版)内容「暮らしから見つける木更津の文化資源」

その他のお知らせ

上総木更津金鈴塚古墳出土品国宝化推進事業公開講座を開催します。

古墳時代を代表する遺跡の一つである金鈴塚古墳について、最近の研究成果を交えながら紹介します。



(申込受付は、平成三十一年一月十五日から) 講演 朝鮮半島から見た古墳時代の木更津、そして金鈴塚

講師 国立歴史民俗博物館 研究部准教授

高田貫太(たかだ かんた)氏

日時 平成三十一年二月二十三日(土) 午後

〇時三十分受付 午後一時開始

場所 木更津市立中央公民館 多目的ホール



平成29年度開催の公開講座「金鈴塚古墳と祖(おや)の信仰」の様子

編集後記

このたび、『木更津市史編さんだより』第三号を発行します。

第三号は、明治一五〇年記念号として関連記事を掲載しました。また、トピックスとして東京湾最大の砂州干潟の盤洲干潟について紹介しています。ぜひご覧ください。

これからも、新たな『木更津市史』編さんの中でわかった木更津の歴史・文化・自然について紹介します。

なお、編さんだよりのバックナンバーは、市のホームページに掲載しています。

(事務局)